

Ⅲ まとめ

1. 湧水群周辺の旧石器遺跡

本遺跡は、北関東自動車道第Ⅱ期工事に係る事前調査として平成13～15年度に断続的に発掘されたものであり、旧石器時代から中・近世に及ぶ複合遺跡であることが判明した。北関東自動車道は関越道・高崎ジャンクションより分れて県央部を横断、地形的には前橋台地・広瀬川低地帯・赤城山南麓・大間々扇状地・八王子丘陵・渡良瀬川扇状地を横断するものであった。高崎工事事務所として所管する第Ⅱ期工事は伊勢崎インターから栃木県境間が対象となったが、旧石器遺跡は大間々扇状地Ⅰ面で5遺跡、八王子丘陵・渡良瀬川扇状地で各1遺跡が発見され、改めて県内旧石器遺跡の濃密な分布が再認識させられた。

本遺跡は大間々扇状地Ⅰ面に立地する遺跡であるが、第Ⅰ期工事では同Ⅰ面で2遺跡5地点の旧石器遺跡が確認されている。これに加えて伊勢崎インター周辺域ではその関連開発として工業団地が造成、その事前調査として相当量の旧石器遺跡が発掘され、伊勢崎インター周辺域における旧石器遺跡の高密度分布は否定し難い事実となった。

伊勢崎インター周辺の旧石器遺跡は標高90m前後の台地上にあるが、この標高90m付近は大間々扇状地Ⅰ面の湧水ポイントでもある。伊勢崎インター北の男井戸・角弥清水、インター東の尼ヶ池等であり、本遺跡南にも無名湧水2ヶ所が近世絵図に記載されている。これら湧水群と遺跡分布が関連することは、大間々扇状地の遺跡分布調査でも明らかとなっており、旧石器遺跡についても同様であることは容易に想像されるところである。

以下には、発掘調査で明らかにされた地形発達を踏まえ、旧石器遺跡の分布状況について若干の傾向を述べていきたい。

1. 前道下遺跡における地形発達

前道下遺跡では本線部と側道部の事業主体者が異なり、これに用地買収の進捗が加わり、相当な分断調査となったようである。担当者は状況に応じ調査すべきであるが、部分から全体を予見するには限界があり、地形発達を考える基礎的データが決定的に不足した。

整理作業を進める過程で、旧石器分布が旧地形に制約されたものであるという、当然と言えば当然な結論が見えた。データの的には低地部のセクションが不足、これを補う目的でボーリングデータの利用を考えてみたが、諸般の事情で入手することができず、今回は上層の遺構確認面のコンタ図と埋没谷のセクションを参照、旧地形を復元するという方法を採用した。

<低地部・埋没谷の認定>

第1図に、旧石器の試掘配置図に20cmコンタを挿入した図を示した。これにより低地部5ヶ所（下谷1～5）・埋没谷3本（上谷1～3）を認定した。

低地部5ヶ所は、いずれも路線内に入り込んで確認されている。本線部Ⅱ・Ⅲ区の境に入り込んだ低地（下谷3）は谷頭のみであり詳細は不明だが、各低地部のテフラの有無については概ね状況が判明、Ⅲ・Ⅳ区の低地部（下谷4・5）でAs-B・As-Cが確認されたようである。その他の低地部では、調査所見としてはテフラの堆積は確認できなかったということであるが、これは路線内に限って言えることであり、より標高の低い路線南側の低地部には上述したテフラが堆積するであろうことが明らかである。

これに対して、埋没谷は路線北に延びることが明らかであり、その位置関係から古期埋没谷と称することも可能である。遺跡中央（Y=-190）の埋没谷（上谷2）のみ未確認であるが、埋没谷が暗色帯を切り、As-ok1降下前後に埋没（As-YP降下後

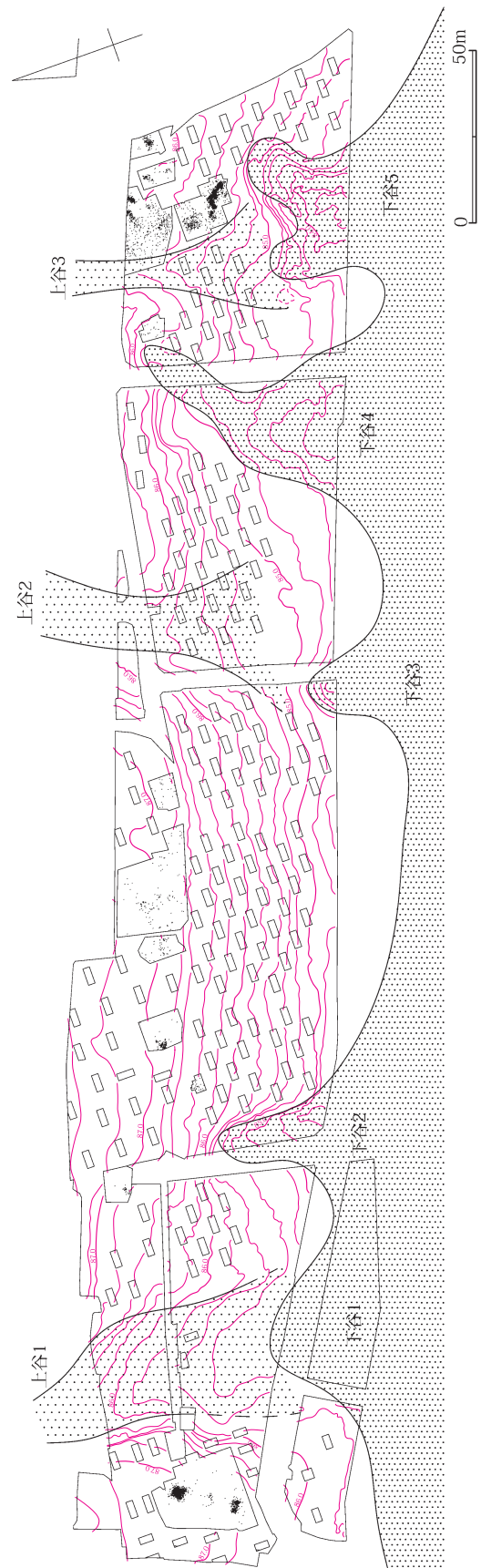
も凹地として残存)することは、西側低地部・埋没谷(上谷1)のテフラ分析で指摘されているところであり、発掘ではE地点・北壁の断面調査で暗色帯を切る埋没谷(上谷3)の存在が確認されている。問題は台地を大きく浸食するような事情が生じたということであり、その理由が問われることになる。

<位置関係>

埋没谷が路線北に、低地部が路線南に延びることは、図により明らかである。厳密には両者とも埋没谷であり、埋没谷を上谷・低地部を下谷と称すべきことを助言されており、以下そのように称していくが、両者の位置関係は微妙に外れることに気づく。両者が一致するのは上谷1と下谷1のみであり、浸食(谷)の方向性が異なるように見える。地形学的にはこの程度のズレは問題にならないのであろうが、埋没谷(上谷3)が分裂したように見える下谷4・5の形成など、地形が固定的でないことは明らかである。路線北に延びる谷が古く、路線内に谷頭を持つ谷が新しい谷であろうが、その根拠として現水田に連なる低地部と、台地奥に入り込む埋没谷という位置関係が上げられようか。

<形成要因>

さて、埋没谷の形成期について暗色帯形成以後であることは明らかであるが、その原因については不明とせざるを得ない。これについては別項にて前橋工科大学・早田氏の考察があるが、基本的には湧水点の変動を基調とした地形発達の中で理解すべきであると考えている。湧水について、それは基本的に変動しないことが大間々扇状地の遺跡分布調査で明らかにされた。従前、地理学においては、湧水は後退するということが囁かれたように聞いているが、湧水を囲む縄文中期集落の存在が湧水後退説を否定したのである。縄文中期集落の存在という明確な物証を以て否定したこれについて異論を差し挟む余地はないが、旧石器時代においても本遺跡で明らかにされた埋没谷が存在、これに制約された石器分布という実態、これについても否定し難い事実となった。



第1図 台地縁辺の微地系

Ⅲ まとめ

同じ大間々扇状地上にある三室間ノ谷遺跡では旧石器時代の埋没泥炭層が確認されており、扇状地上の微妙なコンタの凹凸（従来は扇状地形成時の凹凸、河道を反映したものとして理解）の一部には、上述の埋没谷に相当するものがあるだろうという想定が、可能性として浮上してくる。

埋没谷の形成要因として湧水点の変動を想定したのであるが、渡良瀬川の変流（As-BP堆積以前に離水）による地下水位の変動等も可能性としてあるのではないかと、という助言もある。これについてはより大きなレベルで気候変動を加味したイベントとして認定ができるのか、問われなければならない。前道下遺跡の低地部では、三室のような埋没泥炭層は確認されていないが、より低地部に近い地点ではローム層下に泥炭層（PL3-3・4）があるように見える。本線部Ⅱ区でも旧石器の試掘はおこなわれているが、この地点にも埋没泥炭層が存在した可能性も高い。もし、これが事実なら男井戸・尼ヶ池といった湧水下に展開する低地部と同様に、現低地と埋没泥炭層を有する旧低地という二重構造が見えてくる。

2. 前道下遺跡における旧石器分布と旧地形

冒頭の基本土層の項で述べたとおり、東西の埋没谷は暗色帯を切り込み、As-ok1降下前後で埋没が始まること（Ⅳ. 火山灰分析の項を参照されたい）が明らかになっている。本遺跡から出土した石器群は6地点に達し、旧石器が点々と分布するといった状況であった。

時期別に見ると、A・B地点出土の石器群がAs-ok1を含む硬質ローム層中から、C～E地点出土の石器群がAs-BP層中から、F地点出土の石器群が暗色帯中から出土した。段階的にはA・B地点が尖頭器段階のそれであるが、やや細身の尖頭器が主体を占めたA地点と、左右非対称の尖頭器が主体のB地点では段階差があるかもしれない。同様に、C～E地点の石器群もAs-BP層中とされたが、C地点が角錐状石器の盛行期、D・E地点が石刃石器群

を主体とするようであり、同時存在した可能性は低い。

石器分布域：谷という視点からその位置関係を見ると、A地点出土の石器群が上谷1を、B・C・F地点の石器群が下谷2を、E地点出土の石器群は上谷3を意識して立地したことは明らかであるが、問題はD地点出土の石器群で、これについてはどちらともいえない状況にある。D地点出土石器については、やや蛇足になるが、本文中の事実記載に加えて構造的解説が必要である。D地点については調査上の便宜的区画を踏襲してそれぞれ西側・中央・東側分布域として記載したが、分布論的には礫群の密集分布した西側分布域と、石器・礫が散漫に分布したそれ以東に大別することができる。石器や礫の接合関係も後者に偏在している。加えて、その分布状況もE地点北側分布域C～G群に相同で、E地点出土の礫と接合関係があり、どちらかと言えば上谷2を意識した可能性を指摘しておきたい。

各石器群は、台地奥に入り込んだ埋没谷を意識・立地したことものと見られ、これが埋没してから後に、石器群が残されるということはなかったようである。

3. 湧水と周辺旧石器遺跡

本遺跡周辺は、大間々扇状地Ⅰ面の湧水群として知られている。伊勢崎市三和町の男井戸・角弥清水・谷地清水、旧東村の尼ヶ池がそれである。

<湧水「男井戸」>

三和工業団地Ⅰ遺跡の発掘において、As-B下における低地の状況、4世紀における谷頭の改変状況が明らかにされた。これに加えて遺跡東南の低地部で旧石器時代の埋没泥炭層が確認されている。湧水「男井戸」の谷頭は、三和工業団地Ⅰ遺跡の北に延びるであろうが、大井戸遺跡や書上遺跡の発掘で、男井戸に入り込む支谷が確認されている。

大井戸遺跡は、平成10年度に北関東自動車道の第Ⅰ期工事として発掘された遺跡で、低地部の調査がメインとされた遺跡である。湧水の右岸側ではAs-

1. 湧水群周辺の旧石器遺跡

BP以下が砂礫層であったのに対して、左岸側は三和同様の黒色泥炭層が見られた。また、湧水左岸側は圃場整備により削平を受け、As-ok 1 相当層より上位を欠いていたが、調査区の東南隅において人頭大の礫が弧状に出土、その配列状態からテントの裾を押える「幕尻礫」としての可能性が有力視された。この幕尻礫は人頭大の礫が頭を見せたところで確認されたものであり、以下には20cm程度の石器包含層が残っているはずであったが、石器の出土が皆無であり、遺構として評価することはためらわれた。これより5mほど北のトレンチでは幕尻礫出土相当層より10～20cmの間層を挟んで旧河道様の砂礫層が存在、遺跡北東側へ延びることが判明した(第3・4図)。

大井戸遺跡に隣接する書上遺跡(北関東自動車道第Ⅱ期工事)では、大井戸遺跡から北東に延びる河道の延長を確認、地形復元に成果を上げた。河道は二股に分かれ、さらに調査区の北へ延びることが明らかになり、これを避けるように石器が分布した。

<湧水「角弥清水・谷地清水」>

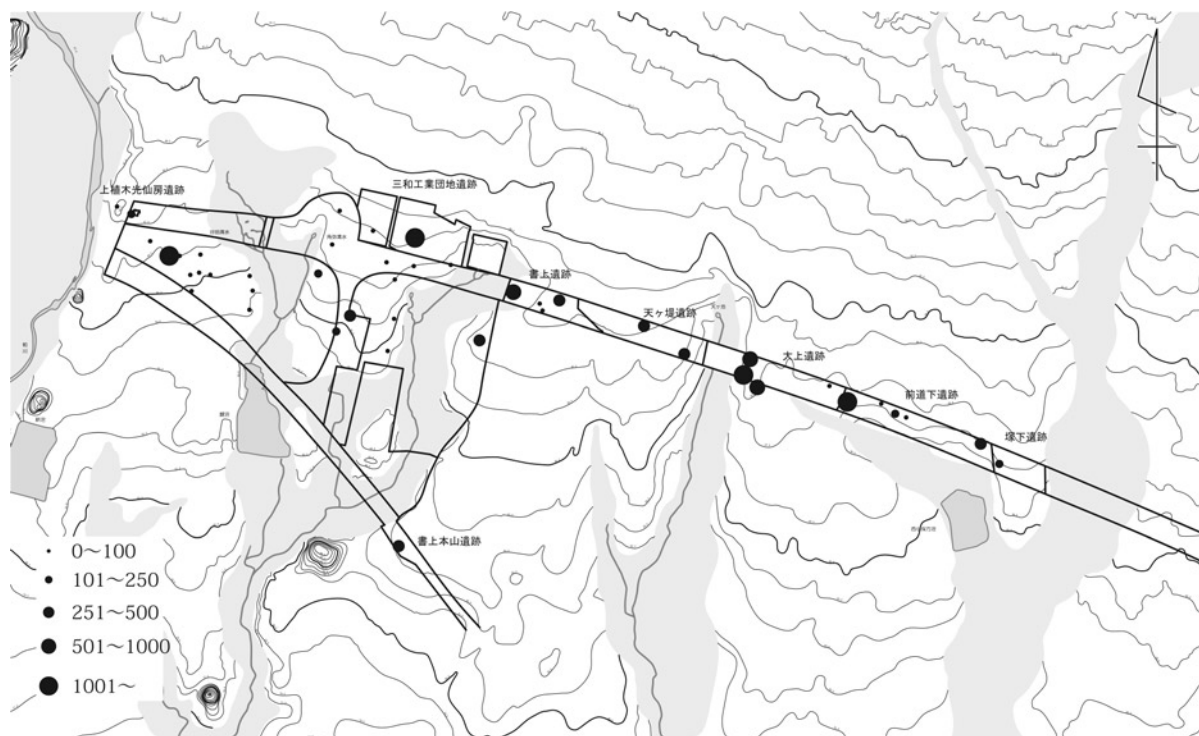
聞き取り調査によれば、昭和50年代初期まで湧水

が見られたようであるが、上記湧水は圃場整備により消滅したということである。角弥清水が舞台遺跡側の谷地に、谷地清水が光仙房遺跡側の谷地に所在した。

角弥清水のある東側の谷は礫層の直上が黒色土(As-B・Hr-FAが堆積)に覆われ、周辺台地部のロームが粘土化していなかったのに対して、谷地清水のある谷の西側台地(光仙房C区)はローム層が白色粘土化、粘土採掘坑として利用されていた。調査者の所見では小支谷を挟んだ東側台地(D区、角弥清水の谷の西側台地)や谷地清水西側台地(B区)でも、ローム層が粘土化していたということである。

<旧石器遺跡の分布>

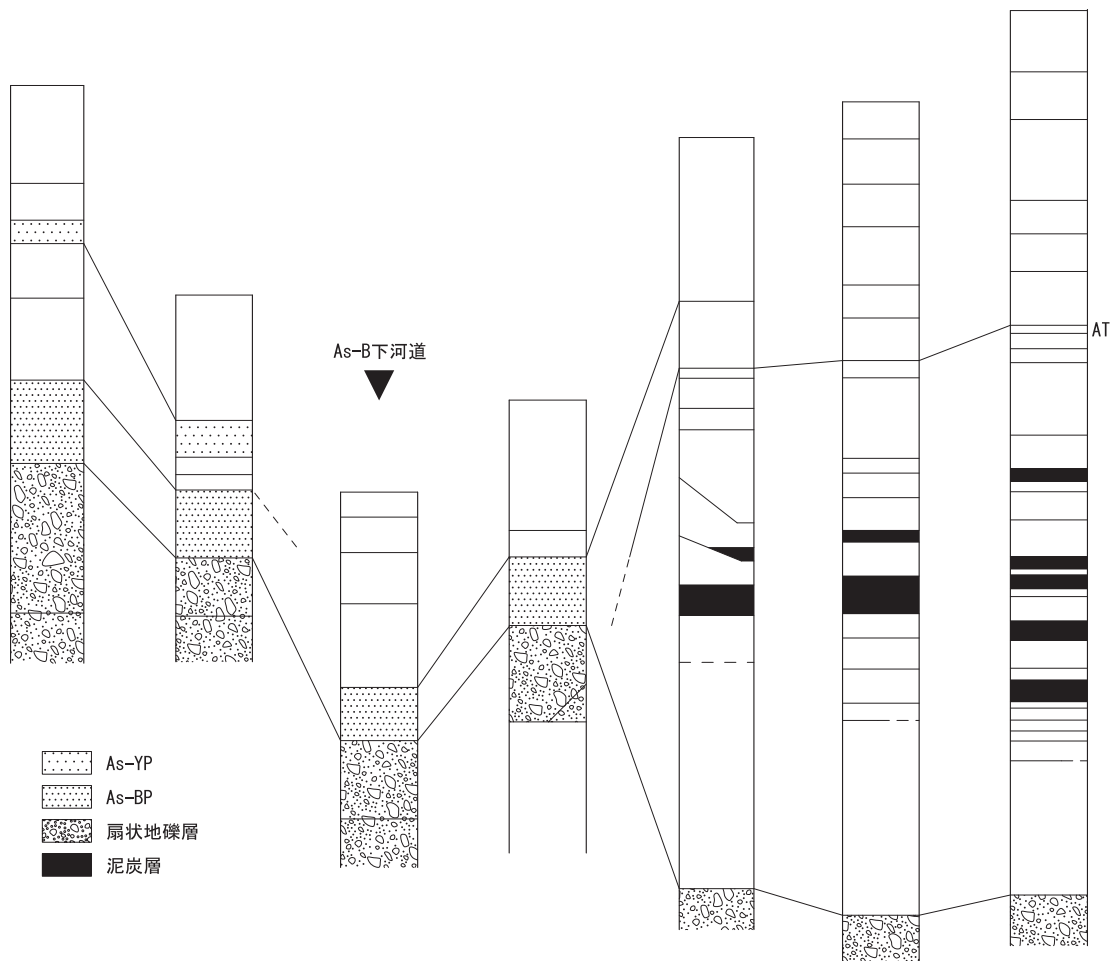
これに対して、旧石器分布(第2図)は点在傾向が明らかである。こうした遺跡の点在傾向が湧水群周辺域における旧石器分布の特徴である。旧石器・縄文時代の遺跡は水場に規制されるのが常であるが、このことを前提とすれば、それだけ居住適地として恵まれていたということになる。



第2図 旧石器遺跡の分布

〈関口博幸 原図〉

86.00



第3図 大井戸遺跡低地部土層柱状図 (1/20)

＜三和地区周辺＞

男井戸・角弥清水・谷地清水周辺域において確認されている旧石器遺跡は、相当数に上っている。旧石器遺跡の認定については、単位的石器群をもってなされるべきものであろうが、それについて報告が済んだ現時点においても石器群の同時性を確定できないという現状がある。そのため、ここでは極めて雑駁ではあるが、石器群の出土層位を基準として、時期別分布の概要を記載する。

暗色帯に出土層位を持つ石器群は、22地点がある。このうち、2ヶ所が環状ブロック群（三和工業団地Ⅰ第Ⅳ文化層・三和工業団地Ⅲ調査区⑦）、後田段階の石刃石器群が舞台遺跡の2地点（A1・F3）にある。その他の地点については指標となる石器類

がなく、詳細は不明である。石器群は男井戸・角弥清水間、谷地清水南のローム台地、谷地清水・粕川間の台地に満遍なく分布するようである。概して、石器分布は小規模であり、22地点中16地点（72.7%）が100点未満の石器群であった。小規模石器群が点在するのが特徴となるのであろうが、比較的出土量の多い石器群が男井戸西側の台地に分布、そして、そこには環状ブロック群2ヶ所が含まれていることは注目されるべきだろう。小規模石器群の大半は、各種石材の部分的消費か石器類を少量遺棄したものと見られ、これを素直に見れば極めて短期的な逗留が想定されることになる。

暗色帯出土石器群以外は、後半期砂川期石刃石器群1・尖頭器石器群1・細石刃石器群5地点が分布

した。石刃石器群・尖頭器石器群は粕川に近い台地縁辺（北関東自動車道調査分の上植木光仙房遺跡）にあり、後者においては石器ブロック2・礫群1が確認されている。5地点の細石刃石器群は角弥清水に近い地点に1ヶ所（舞台遺跡A区）、男井戸側の低地を望んだ台地縁辺に1ヶ所（舞台G区）にあり、この2地点を除いて、いずれも粕川を望む谷地清水より西の台地に分布（県道拡幅の上植木光仙房、北関東自動車道の上植木光仙房、三和工業団地Ⅳ遺跡J区）した。上植木光仙房については距離的に近く、本来同一遺跡で考えてよい遺跡であるが、湧水を意識したというより粕川を意識した立地と捉えるべきであろう。

＜尼ヶ池周辺地区＞

旧石器分布は湧水右岸の天ヶ堤遺跡で2地点が、三和工業団地Ⅱ遺跡で1地点が確認されている。左岸側の大上遺跡でも複数地点で確認されているが、詳細は不明である。

尼ヶ池周辺域でも暗色帯出土の石器群が主体を占めるようであり、天ヶ堤・大上で環状ブロック群が確認されている。大上遺跡では台地縁辺が削平されており、全貌は不明であるが、複数段階の石器群が分布したようであり、当地域には珍しく石器群の重複が著しい。

暗色帯以外では、尖頭器石器群1地点で確認されているが、前道下遺跡側から延びる低地の谷頭に分布するようであり、厳密には分けて考えるべきものだろう。現状では、細石刃石器群については未確認であるが、周辺域では同段階の角二山型搔器が確認されており、細石刃段階の遺跡が分布する可能性も否定できない。

4. 湧水群周辺における地形発達の画期

以下には、前道下遺跡で見られたような地形浸食と同様な状況が他の地点にもあるのかということについて検討していきたい。

＜角弥清水・谷地清水＞

角弥清水のある谷が黒色土に覆われていたことに

ついてはすでに述べた通りであるが、湧水の左岸側の台地が通常のローム層が堆積していたのに対して、右岸側の台地は白色粘土化していた。この白色粘土化した台地は谷地清水側の台地にも見られたが、詳細についてはテフラ分析がなされていないため、明確ではない。報告書によると、谷地清水側（光仙房遺跡D区）には3本の河道（B・D・F河道と呼称、河道Fは角弥清水の谷に相当）があり、これに台地（報文中では西側からA・C・E台地と呼称）が分断されていたということである。河道の形成時期については不明だが、河道Bより4世紀代の土器が、河道D・Fより縄文土器（後期・加曾利B2式）が多数出土、C台地から古墳時代後期の粘土採掘坑が確認されたという。C台地の採掘坑は、白色粘土下の黒色粘土を狙ったものであり、黒色粘土は暗色帯に相当し、通常堆積したローム層が水の影響で粘土化したものとされている。粘土採掘坑より下については記載がなく、それより下位の泥炭層の有無は不明だが、少なくとも暗色帯形成以後については離水していたということなのであろう。これに似た状況が波志江中宿遺跡A区で確認されているが、ここでは暗色帯下に1m近い泥炭層が確認されている。

＜男井戸＞

男井戸周辺域の三和工業団地Ⅰ遺跡では、低地部4ヶ所（A～D地点）でテフラ分析がなされている。調査区西のA・C地点では、暗色帯相当層から縄文期（As-D?）の泥炭層が、調査区東のD地点では扇状地礫層を覆う縄文期～古代（As-B）の泥炭層が堆積することが確認されている。A地点の泥炭層は途中間層を挟んでおり、乾燥期（As-ok1前後）があったことを示している。

大井戸遺跡では、湧水の右岸側は扇状地礫層が直接As-BPで覆われていたのに対して、左岸側はAT下位に複数枚の泥炭層が堆積、AT降下後には離水していたこと（第3図）が明らかになった。図の右端の地点についてはテフラ分析されていたが、未報告となっており、参考資料として別図（第5図）に示した。これに加えて、調査区南東端の幕尻礫出

Ⅲ まとめ

土地点についても分析データ（第4・5図）があるので掲載した。この幕尻礫については人為的所産としての積極的な根拠が見出せなかったが、湧水周辺の地形発達を考える上で重要なデータとなるので説明しておきたい。

大井戸遺跡の発掘でAs-ok 1 相当層下部から幕尻礫が出土したことは、さきにも述べたとおりである。その配列状態は、あまりにも人為的であったため、北西側に調査区を広げ確認したところ、確認面より20cmほど下に大型礫の出土が確認（写真1を参照）、併せて白色火山灰層（AT）上面において北東から南西に向う河道跡（幅5m弱）の存在が判明した。河道跡は幕尻礫の西側で幅を狭めるようであり、プラン的には消滅するように見えた。続いて、その性格を明らかにするために、河道跡に直交するようトレンチを設定、河道を断ち割り調査（写真2）した。調査区東で断ち割り調査した河道部の断面は河道であるが故に互層堆積が見られ、ATを切り込んでいることが明らかであった。また、河道に直交するように設けたトレンチでは扇状地構成礫が多量に出土、それ自体は扇状地礫層が供給源ではあっても、湧水程度の水量で供給できるものではなく、小規模河川の存在、あるいは、河川起源の氾濫性堆積が想定されるべきものであったが、いずれも妥当性がなく、その性格は現在も明らかにできないでいる。

幕尻礫出土地点のテフラ分析では、それがAs-BP降下以後の所産であり、谷の最下面がATの上であるという指摘がなされているが、調査区東の断面では明らかにATを切り込んでいるなど、所見に齟齬を来している。書上遺跡では東側の河道でATを

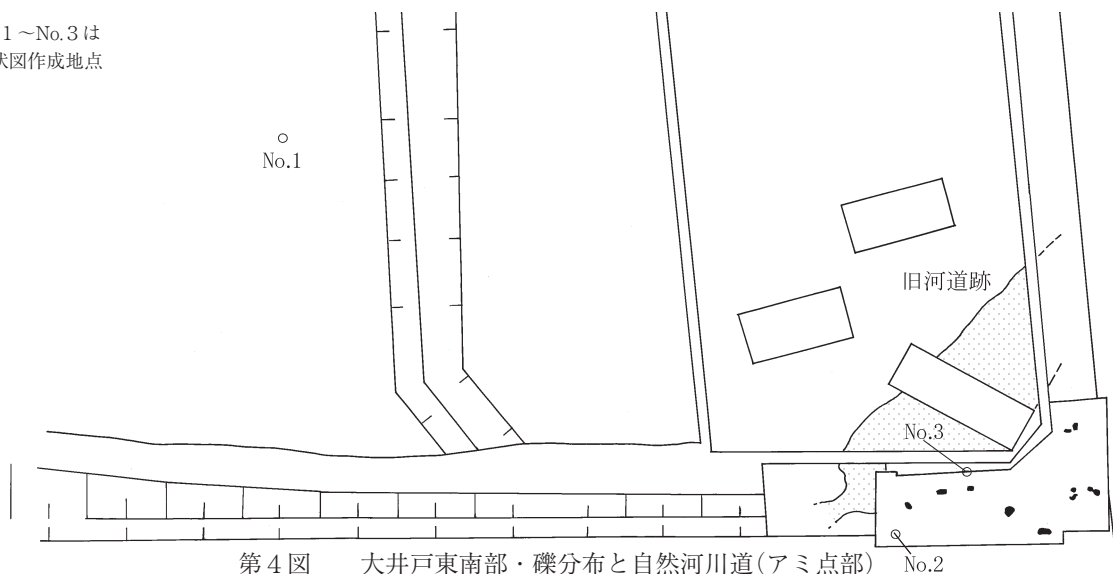


写真1 配石瓦礫とAT（断面に白く見える）を切る河道

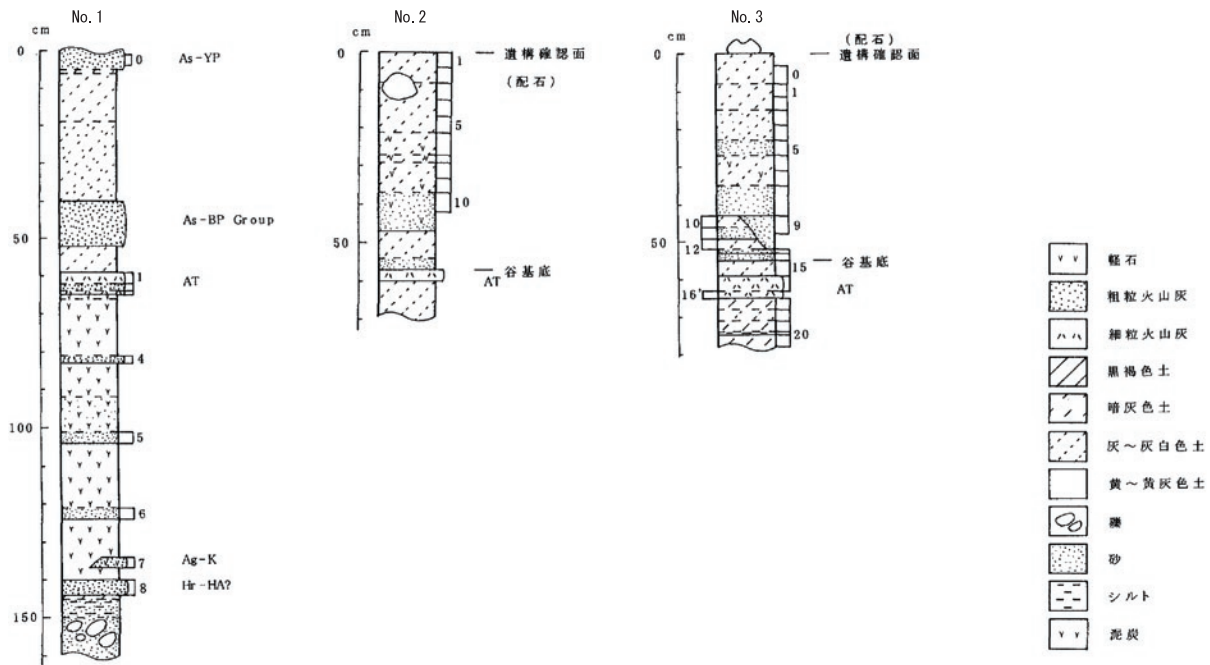


写真2 河道出土の礫

No.1～No.3は
柱状図作成地点



第4図 大井戸東南部・礫分布と自然河川道（アミ点部）



第5図 大井戸遺跡 配石礫周辺の土層柱状図

目視したということであるが、西側河道については未確認であり、これについては詳細を現状で明らかにすることはできない。書上には新旧2本の河道があり、河道が大井戸遺跡においては幕尻礫の下を流れていると見れば、疑問の一端は解消されることになる。

男井戸下流部でも、谷を横断するようテフラ分析のなされている地点がある。三和工業団地遺跡Ⅲ跡の分析データがそれで、谷を横断するよう5地点の分析データ（第6図）が示されている。左から3本目の柱状図が現在の湧水の流れる低地のデータで、Hr-FA前後からAs-B下までが泥炭層となっている。その左側（男井戸右岸）がAT降下前まで、右側（同左岸）がAs-ok1降下前まで泥炭層になっており、右岸側低地の離水が先行したことが明らかになっている。一方、書上遺跡Ⅳ区・低地部では扇状地礫層を覆う暗色帯が確認されている。この低地部は大井戸・東南端の河道（幕尻礫出土地点）に連なるものであり、谷から多量の礫が出土することに調査中から気付いていたようであり、谷は確実に調査区北に

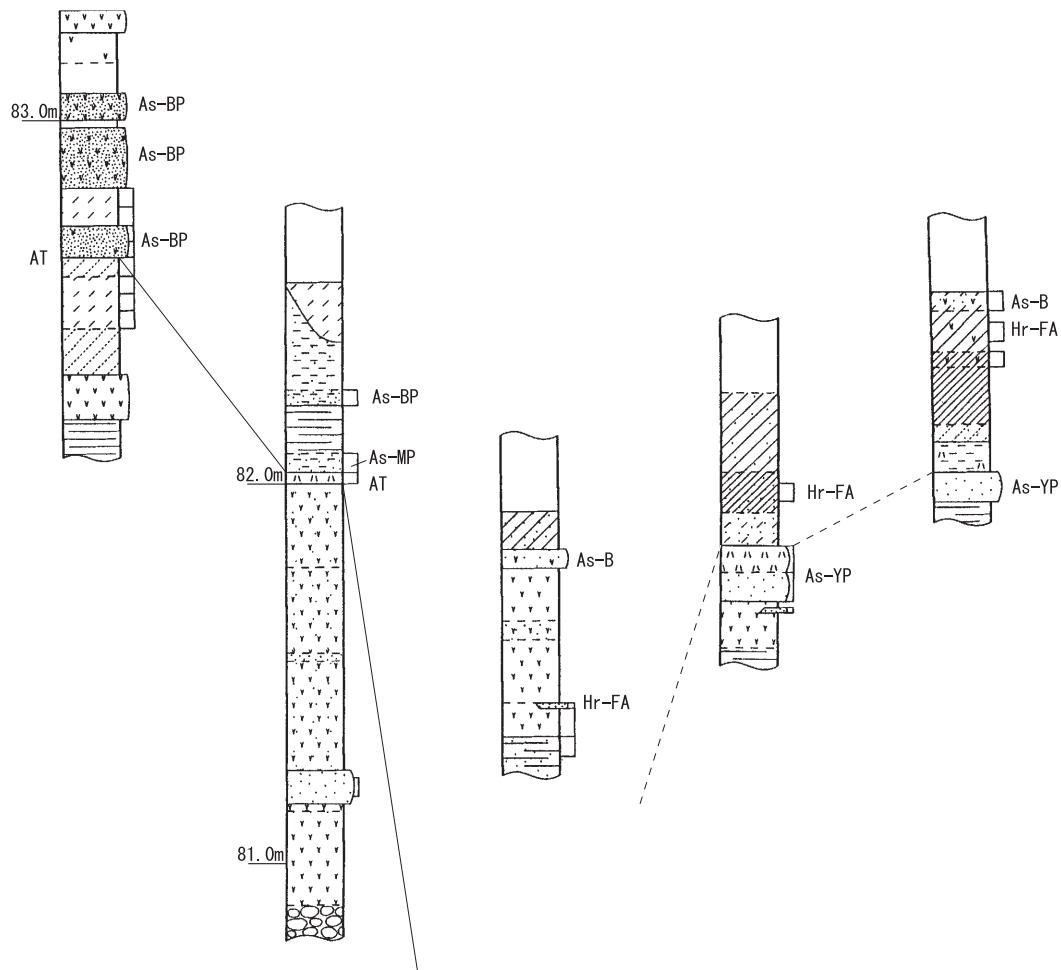
延びるということである。三和工業団地Ⅱ遺跡の報告には調査区南西に低地部として概念図が掲載されており、昭和30年代の地形図にも等高線が窪んで表示されており、書上遺跡の谷の延長、あるいは、男井戸の延長として理解すべきものだろう。

男井戸周辺の地形発達については、現在のデータでは解決できないことが多い。扇状地礫層の高い部分を湧水が流れていたのではないかと発掘所見もあるが、泥炭層形成の過程は単純でなく、網目状に絶えず変流するものとして理解すべき程度のものであろう。前道下同様の暗色帯を削りAs-ok1前後に埋没する谷というのは、大井戸～書上に連なる谷が唯一可能性として指摘できるのにとどまる。

<尼ヶ池>

天ヶ堤遺跡側の低地部に分析地点があり、泥炭層が確認されている。泥炭層はHr-HA降下前後からAs-ok1降下段階まで連続、谷幅の狭い中央部では扇状地礫層を直接黒色土が覆う状況は変らなかった。大上側の台地西側斜面は圃場整備により削平され、旧石器包含層を欠いていたが、台地東側（天ヶ堤）

Ⅲ まとめ



第6図 三和工業団地Ⅲ遺跡 低地部 土層柱状図

の傾斜に比べて、台地西側斜面部が急であるという傾向が明らかであった。こうした傾向も地形発達に関係する可能性も否定できないが、詳細は明らかでない。分析地点が1ヶ所と少ないが、谷の地形発達を反映しているものと看做せば、As-BP降下後より徐々に泥炭層が縮小、離水が進んだものとすることができる。

5. 地形発達と旧石器分布

前道下遺跡では、埋没谷3ヶ所の存在が明らかになった。台地中央の上谷2に関する浸食・埋没時期は確認されていないが、上谷1・3のそれについては暗色帯形成以後の浸食、As-ok1降下前後の埋没

ということになる。遺跡が扇状地内の平坦な台地上に立地すること、台地を浸食するような河川が付近にはないこと、上谷と下谷は微妙に外れることから、湧水ポイントの変動による浸食・埋没という可能性が浮上、周辺遺跡における地形発達を再検討した次第であり、書上-大井戸遺跡間に同時期の浸食を認めることになった。

前道下遺跡では、遺跡分布についてもこの埋没谷に規制されたかのようにであった。特に、E地点では石器・礫が埋没谷左岸の斜面部に張り付いて出土、埋没谷右岸にも礫分布があり、当該期石器群の形成時期が埋没谷形成後であったことを示唆した。

三和・書上地区では、本遺跡にあるような埋没谷

は書上－大井戸間の埋没谷が該当する程度で、これ以外に埋没谷の存在を指摘することは現時点では難しいようであるが、AT降下以後の埋没泥炭層縮小（＝浸食の進展と読み替えるべき）が連動するものだろう。

旧石器分布は、散在的であることが特徴である。これは居住適地が1ヶ所に限定されないということを反映した可能性が高い。各地点の石器群は100点以下であることが多く、石器製作の部分的表出（石核の部分的消費や搬入石器の遺棄）に止まるものが圧倒的であり、角弥清水・谷地清水側において特にその傾向が強い。三和工業団地Ⅰ遺跡における環状ブロック群と相次ぐ暗色帯中石器群の発見は、湧水を取り巻く生活拠点としての旧石器遺跡として理想的であったが、石器群の実態はさまざまで、これは明らかに尖石以来の幻想というべきであり、各石器群の大半が短期逗留型であることがそのことを如実に示している。

三和地区においては、暗色帯出土石器群の分布も特徴的であるが、細石刃段階の遺跡分布に注目しておきたい。三和地区の細石刃石器群は光仙房のそれがホロカタイプ、舞台・三和工業団地Ⅳ遺跡のそれが矢出川タイプである。これについては細石刃核3タイプを出す遺跡分布が、山岳部と平野部という脈絡で言及されたことがある。この見解について現状で検討を加えるだけの蓄積はないが、赤城山南麓においては、細石刃段階に至り内陸水産資源の開発が活発化したものではないかという問題提起に対する検討が可能となったことを評価すべきだろう。三和工業団地Ⅳ遺跡J区の石器群には配石礫（集石）が伴ったようであるが、周辺域にもこれと同様な礫が分布していたような記憶がある。このことについて報告書に記載がなく、資料を再検討する必要があるが、いずれにしても三和地区においては当該期石器群の分布密度が県内他地域に比べて突出していることだけは明らかである。その立地条件からサケマス漁に結び付ける考え方もあるだろうが、細石刃段階の太田市八ヶ入遺跡と同じ段丘面に尖頭器段階の東

長岡戸井口遺跡があり、河川に接して立地しているからという理由で、ただちにサケマス漁を想定するのは早計であろう。

また、周辺域では尼ヶ池周辺で角二山型搔器が採集されているほか、大間々扇状地Ⅱ面（早川流域）の下田遺跡で北方系細石刃石器群が出土するなど、この段階の遺跡動向は注目に値する。三和地区周辺を細石刃段階の遺跡密集地帯とするなら、これに似た状況は縄文時代草創期（爪形文・押圧縄文段階）の遺跡分布にも指摘されるようであり、定住化に向けた一連の動向の中で理解されることになるのかもしれない。前段階の尖頭器石器群にも遺跡群形成が見て取れる可能性も否定できないが、これについては移動形態（サイクル）が明らかに異なる。

6. 終わりに

三和地区には、過去10年に及ぶテフラ分析が集積していたのにもかかわらず、いざ遺跡間対比しようとする、分析してしかるべき地点の分析がなく、困惑した。我々の記載は主観的であり、専門家の記載に遠く及ばないことは明らかであり、担当者が遠くを遺跡間対比をしようとしても対比できないという現実がある。近年は分析さえすればよしとする風潮は影を潜めたが、全般的には未だ未消化であるというべきであろう。文化財側は事態を深刻に受け止めるべきであるが、これまでの経過を考えると、そう簡単に解消できるものではないように見える。これを解消するには他分野の分析に積極的に関わる以外ないだろうが、考古学的分析に有効であることを具体的に例示することが第一義となる。その第一歩として本報告を位置づけたいが、気候－植生分析には至らず課題として残った。

昨今の文化財を取り巻く情勢は極めて厳しいものがある。行政的には、普及に力点が置かれるべきとされているが、成果を還元するにも基となる成果がなければ、それも叶わない。遺構・遺物が対自然・対社会的な脈絡で遺されたものである以上、それを射程に入れた調査が模索されるべきであろう。